

文部省選定

東京都知事推奨

中央児童福祉審議会推薦

中央青少年団体連絡協議会推薦

日本PTA全国協議会特別推薦

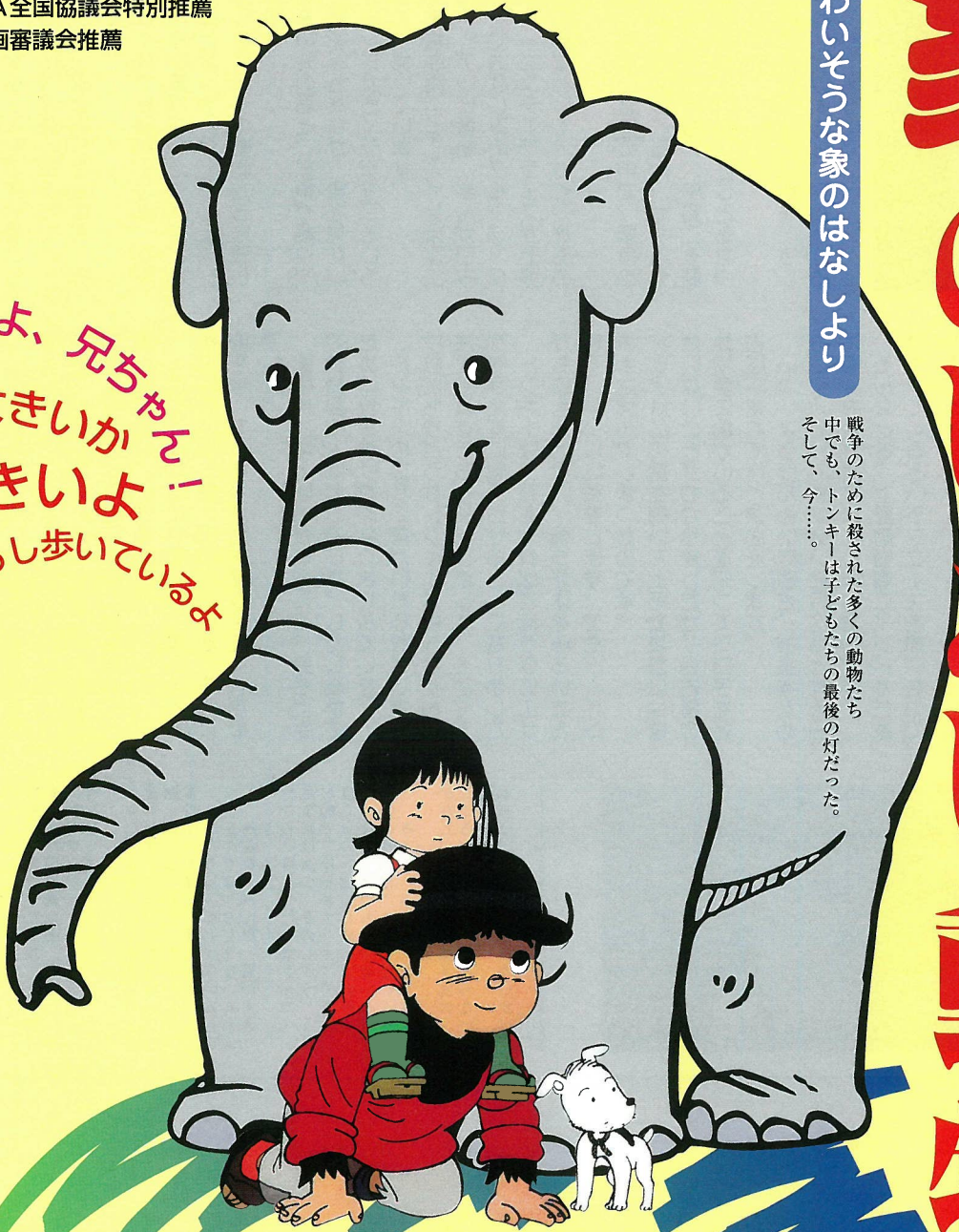
青少年映画審議会推薦

# 象のいない動物園

かわいそうな象のはなしより

戦争のために殺された多くの動物たち  
中でも、トンキーは子どもたちの最後の灯だった。  
そして、今……。

象だよ、兄ちゃんて  
大きいからー  
大きいよ  
のっしのっし歩いているよ



◎スタッフ

製作 古川博三

田代敦巳

企画 篠崎 順

伊藤正昭

脚本 本 斎藤 憐

演出 前田庸生

美術 田中静恵

レイアウト 青木 稔

作 詩 荒木とよひさ

作曲 クニ河内

音響監督 明田川進

音響効果 柏原 満

撮影 V・A・C

編集 集 古川雅士

プロデューサー 宇田川東樹

オリジナルサウンドトラック盤/ビクターレコード

原作 本/ヘラルド出版刊

製作協力/シネマ・ワーク

東急レクリエーション

製作/ヘラルド・エンタープライズ

グループ・タック

配給/ヘラルド・エンタープライズ

シネマ・ワーク



## かいせつ

このお話は、小学校一年生の教科書にも出てくる「かわいそうな象」のエピソードを、アニメーション映画にしたもので、本当にあった話です。

戦争のはげしくなった昭和十八年、動物たちが、動物園から逃げだしたら大変というところで、子どもたちに人気のあった象(トーンキー)をはじめ、多くの動物たちを殺してしまつたのです。

この映画はその時の話と、戦争が終り、この事を知つた子どもたちが、象を見たいと呼びかけ、インドからインディラという象を迎えるまでを描いています。

この作品は劇場映画「ジャックと豆の木」「11ぴきのねこ」テレビ番組「まんが日本昔ばなし」などでおなじみのグループ・タツフとヘラルド・エンタープライズが上野動物園の百周年記念として、つくつたものです。

上野動物園の百年の歴史の中で、戦争のために動物を殺すということは、もつとも大変な事件であつたとともに、平和こそ動物園には必要であるという、証しともなつてゐる事件です。

今、この時代にこそ、この物語をとうして、生命を守ることの大切さ、平和を守ることを問いかける作品です。

## おはなし

戦争が終つた東京の町は、たくさんのはぐんだんが落されたために、町全体が燃えて、焼け野原のようになっていました。

そんな東京の町に、戦争のためお父さん、

お母さんもなくした、二人の兄妹がいました。ヒデ(十二歳)とミヨ子(六歳)でした。

ヒデは靴みがきをしながら、ミヨ子を育てていました。

ヒデは昔、両親に連れられていつた動物園の象をどうしてもミヨ子に見せたくて、動物園に連れていきました。

そこで以前象にのせてくれた象係のおじさんに会いました。おじさんは悲しそうに象を殺してしまつた話を聞かせてくれたのでした。

象のトーンキーは気がやさしく、芸も上手で動物園の人気者でした。しかし戦争のために殺さなければなりません。

トーンキーのエサに毒が入れられました。けれどもうこうなトーンキーは食べません。

注射で殺す方法も失敗しました。そこでエサを与えずに餓死させることになりました。

トーンキーは、芸をすればごほうびにエサがもらえると思ひ、弱つた体をふるいたさせて、ひつしに芸をします。でも……トーンキーは死んでしまつたのです。

ヒデはこの話を聞いて上野動物園には象がないことがわかりました。名古屋の動物園に象がいることを知つてミヨ子を名古屋へ連れて行く決心をします。

いっしょうけんめいに働き、お金をためるヒデ。そして象に会いに行こうとする日、大切なお金が盗まれてしまつたのです。

そんなとき、上野動物園にインドから象がやつてくるというニュースを聞いたのでした。

インディラと名づけられた象は、大勢の人々の出迎えを受け、行進していきます。出迎えの中にはうれしそうなおじさんとミヨ子の顔もありました。

## あしたの家さん

作詞 荒木とよひさ  
作曲 クニ河内  
歌 クニ河内

やさしい目をした 象さんの  
生まれは速い速い国  
お船でゆられて やつてきた  
何も知らずに この町へ

かなしい目をした 象さんの  
言葉がほくには わからない  
遠くには なれた かあさんが  
本当は 本当は 恋しいか  
ひとりぼっちじゃないんだよ  
ふたりぼっちじゃないんだよ  
みんな みんな 君がすき

やさしい目をした 象さんの  
生まれは海の そのむこう  
お船で ゆられて やつてきた  
ほくらの ほくらの この町へ  
ひとりぼっちじゃないんだよ  
ふたりぼっちじゃないんだよ  
みんな みんな 君がすき

かなしい目をした 象さんの  
ところがほくには わからない  
遠くに残した 妹に  
本当は 本当は 連いたいか

